



授業中の行動決定の主導権は教師が握る

今回は前号の続き、授業時の不適応行動への基本的な対応、その2つ目を述べます。
それは、**授業時間中の行動決定については、教師が主導権を握る**ということです。

子どもの主体性を大切にするという考え方と相反するように思われるかも知れませんが、判断力や自律的な行動力が未熟なうちに、子どもに判断や行動の多くを任せるのは、かえって不安を与え、混乱させることになります。

特に学年が低いほど、新年度のスタートから日が浅いほど、子どもが安心感をもって教師に依存できる関係を築くことが大切です。

あまりに窮屈な思いをさせたり、無用な緊張を与えたりする対応では困りますが、ルールやマナーが守られての自由であり主体性であること、そしてそれが学校生活の快適さや満足感につながることを、理屈ではなく様々な場面での体験を通して理解させるようにします。

教師は、学校社会におけるルールやマナーの象徴たる存在ですので、まずは教師の指示や教師が認める行動の枠組に沿って行動できることを目指します。多くの子はスムーズでしょうが、不適応行動が目立つ子には、特に細やかな対応が必要です。

具体的には、「〇〇〇しなさい」「△△△してはいけません」「〇分待ちますから、その間に△△△しなさい」のように、指示通りの行動を求めることに加えて、子どもの「こうしたい」という意向を受け止めて、それを教師が許可するといった対応を取り入れます。

例えば、「今ここでしていいのは、〇〇〇をするか△△△をするかのどちらかです。それ以外は認めません。どちらを選びますか？」のような言い方です。選択肢を示す際は、1つは必ずその子にできそうなことを加えます。

そして「〇〇〇ですね。いいでしょう、分かりました。」と許可を与えるのです。

教師が主導権を握っていながら、子どもには「自分が決めた」という満足感があります。ここがポイントです。その通りに行動できれば、もちろん「いいね」ですが、うまく行動できないこともあるでしょう。その場合の言葉かけは、「残念」です。

そして、「あなたが自分で決めた（選んだ）ことができなかったことを、私（教師）は残念に思っている。」ということを伝えます。

このようなときには、丁寧語を使い、真顔で、やや事務的な口調がいいでしょう。



こうした対応を粘り強く繰り返し、徐々にうまく行動できる回数・頻度が増してくれば、改善の証として受け止め、子どものがんばりを認めます。

このことは、子どもに、自分のがんばりと前進していることを自覚させることに繋がります。